

# 文学館だより

令和5年5月1日  
若山牧水記念文学館  
TEL 0982-68-9511  
文責 日高 第85号

牧水没後95年。令和5年度始動です。

## 令和5年度事業・企画展のご案内（予定）

### 【企画展（企画展示室）】

日 程	主な 内 容
6.4(日)～8.27(日)	「牧水全国歌碑めぐり」展
9.3(日)～11.26(日)	「伊藤一彦」展
12.3(日)～2.25(日)	「第28回 若山牧水賞」展
3.3(日)～5.26(日)	「牧水の食」展

### 【第1展示室】

5.3(水)～8.27(日)	牧水遺墨展「夏」
9.3(日)～12.28(木)	牧水遺墨展「ふるさと」
1.6(土)～4.21(日)	牧水遺墨展「冬春」

### 【第2展示室】 高森文夫没後25年を偲ぶ

6.2(金)～	高森文夫直筆原稿展「嬌羞（きょうしゅう）の歌」定期的に更新
---------	-------------------------------

### 【企画展（ギャラリー）】 ※無料観覧

7.7(金)～8.18(金)	「牧水・短歌甲子園OBOG『みなと』」展
2.1(木)～	「牧水母校作品」展

### 【主な事業】

4月～8.10（木）	第13回 青の國若山牧水短歌大会作品募集
12.17（日）	第13回 青の國若山牧水短歌大会表彰式
8.19（土）～20（日）	第13回 牧水・短歌甲子園
9.17（日）	第73回 牧水祭
6.21（水）	第1回 伊藤一彦短歌実作講座
8.30（水）	第2回 伊藤一彦短歌実作講座
11.22（水）	第3回 伊藤一彦短歌実作講座
7月～9月	第11回 高森文夫を偲ぶ詩大会作品募集（市内小4～6年生）
1.21（日）	第11回 高森文夫を偲ぶ詩大会表彰式

皆さまのご来館をお待ちしています。

## 注目歌人、もう小学4年生

ふうせんが九つとんでいきましたひきざんはいつもちょっとかわいい

覚えていらっしゃるでしょうか、以前紹介した小学生歌人のことを。  
当時、小学1年生だったやまぞえそうすけさんは、もう4年生です。

楽しみは四年生のきゅう食のパンが大きくなるらしいこと 山添 聰介  
2023.4.16 朝日新聞 掲載

聰介さんが詠むったが大好きです。聰介さんのお気に入り「ものほしさおの歌」、私も気に入っています。待望の山添ファミリー第一歌集が発売されました。

体いくかんでしゅうりょうしきをしていたら外からものほしさおを売る声  
えん足の帰りのバスで見た「コナン」いいところなのに学校につく  
ピピというセキセイインコを見つけたらすぐにマツヤマさんに知らせて  
コンパスではじめて円を書きました算数ノートにバームクーヘン

# 『牧水先生の思い出』（牧水顕彰会刊 昭和29年）より

現日向若山牧水顕彰会の前身、東郷村牧水顕彰会が小冊子『牧水先生の思い出』を残している。初代顕彰会会长 小野 弘氏は発刊にあたって次のように書いている。

「(略) 先生の生立ちなり人柄は遺された数々の作品や遺品遺墨を通じて伺い知ることは出来ても、先生に逢って受けた印象、また逸話等はこれ等の人々が少なくなるに伴って埋れてゆく。私達の最も敬愛する先生のことを少しでも多く残すことは郷土の吾々として最も大事なことではなかろうか。(略) 将来、牧水顕彰に少しでも役立つことが出来るなら望外の幸せである。(略)」

郷土にあって牧水先生と親しく接して来られた方々の記録を、牧水没後 95 年の今年、蘇らせたいと思う。毎回おひとりずつ掲載していきたいと思っている。

## その1 「牧水先生と私」

初代若山牧水顕彰会会长 小野 弘

昭和2年18才になった頃坂本という西旧杵郡出身の親しい友達がいた。二人で宮崎市内の古本屋で漁っているとその友達が春陽堂発行の短歌作法という古い単行本を見つけて「これお前の處から出ている牧水先生の書いた本だよ」と言って教えてくれた。

近闇にも私は牧水先生と自分の故郷が一緒だと言うことを知らずこの時はじめて先生と同郷だと言うことを知ったのである。

その頃私達の間では夏目漱石、芥川龍之介、菊池寛、佐藤紅葉と言った文士の作品に人気のある頃で、この驚きは何時となく私の脳裡から薄れていった。

坂本と言う友達はその頃から歌作りが巧みで新聞雑誌に投稿して度々入選していたので私達も影響をうけて熱をあげたが結局物にならずあれこれと迷い乍ら今日に至っている。この友は数百の歌を残して硫黄島で壮烈な戦死を遂げた。

昭和3年9月先生が亡くなられた新聞を見ても惜しいことをしたと思っただけで先生の作品に心を打込んで読む気にはなれなかった。酒のみの歌作り、これが私の印象であった。郷土の人だと言う甘さがあったのかも知れない。

姉が矢野團治に嫁いだので坪谷にあった先生上京中の先生の印象について度々話を聞いた。亦甲斐善平さんや越智溪水さんと交際が出来るようになって色々な面白い話をきかされた。徐々ではあるが牧水熱が上昇したのである。昭和16年の5月であったろうか大悟法さんが何回目の調査のため坪谷にみえたのである。忙しい旅ではあったがはじめてお目にかかり色々な話をきかされた。その時きかされた牧水先生の人物や作品の話で豁然として眼が開けた。大悟法さんと別れるのが惜しくて山陰から富高まで夜の道を自転車でついて行き駅に送ると又夜の道を自転車で帰った。帰ると私は狂気のようになつて少ない蔵書の中から牧水先生の作品を抜いて読み耽った。酒のみの歌作りの印象は次第にうすれていった。

友達が牧水先生を教えてくれて十数年の歳月が流れこの間敢えて振り向こうとしなかった歳月を恨んだのである。戦争は愈々苛烈となって行くし、先生の著書は全然入手出来ない。焦燥の幾月が流れた。その頃改造社の出版目録に牧水全集の残本があるのでそれを知って急いで注文したが僅か四五冊がようやく手に入っただけであった。最近ようやく大悟法さんのお陰で全巻を揃えたのであるが待ち遠しい幾年であった。この間に大悟法さんの「若山牧水伝記篇」「短歌読本」「若山牧水」長谷川銀作著「牧水襟記」等で先生の外貌をいよいよ深く知ることが出来た。その後私も生活の環境が変って未知の人と逢う機会が多くなった。

「東郷村出身ですか。牧水先生の生地と一緒にですね」私は初めて逢う人の羨望と驚きに常に優越を感じている。然し考えてみると優越とは誇り、これは一体なんであろうか。只先生と故郷が同じだということに満足していればそれでいいのか。それに満足していることは余りにも甘い陶酔であり自己満足ではなかろうか。先生の残された「人生は美しいものである」という魂を一人一人の心にしっかりと沁み込ませねばならない。それによって人生の温かさ豊かさを自身自身が感得すると共に多くの人々にもそれを頒ち与えねばならない。その為には牧水先生の全貌を詳しく知ることと同時に残された遺品遺墨を永久に保存することが大事な仕事ではないか。

百年の星霜を経た古い生家は嘗て私にはありふれた一戸の住家にすぎなかった。然し今見る生家は全国に只一つしかない貴重な牧水先生の生家として私は無限の懐しみと親しみを感じる。只一つしかないこの尊い生家を何としても郷土の吾々の手で護りたいものである。

## 牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

太陽を拝まむ、海もそらもひとつ色なり、いま太陽ををろがまむ